あなたはどう歩く？

時代を読む

浜　矩子

「あなたはどう歩く？」

ぞっとした。背筋が寒くなった。夏場だからというので、怪談を読んでいた時ではない。ホラー映画を鑑賞していたわけでもない。その時、見ていたのは、ドイツのZDF放送が流しているニュース番組だった。

今年のワールドカップ・サッカーで、ドイツチームが優勝した。彼らの凱旋パレードの模様が、賑やかに報じられていた。にわか仕立てのステージ上で、選手たちは得意満面だ。踊り、歌い、倒れ、舞い上がる。精いっぱいのパフォーマンスで、サポーターたちを喜ばせようとしている。微笑ましく思った。

すると、肩を組み、隊列を組んだ彼らが、突如として腰をかがめた。前傾姿勢になった。まるで二足歩行になれていないような構えで、足を引きずりながらのろのろ歩く。そして叫んだ。「ガウチョはこう歩く」

ガウチョは、南米人を指すいささか蔑視的な言い方だ。「ジャップ」に通じるものがある。ドイツの決勝戦の相手がアルゼンチンだったことは、ご存じの通りだ。スポーツマンたちの歓喜の表現が、このような形を取るとは何たることか。自らの勝利をかくも汚すとは、いかなる神経か。息を呑む思いであった。

しかも、その後がさらにいけなかった。「ガウチョ歩き」を披露した後、選手たちはさっと背筋を伸ばした。胸を張り、大きなストライドで誇らしげに行進し始めた。「アーリア人はこう歩く」と、決して叫んでいたわけではない。だが、そんな幻聴も聞こえてしまう雰囲気だった。

この一件、さすがに現地メディアでも話題となったもようだ。日本でも、一部の新聞で取り上げられた。心あるドイツ人たちは、いかばかり恥じ入ったことか。少なくとも、そう思いたい。

人間の心の奥底には、何が潜んでいるか解らない。興奮が頂点に達した時、その秘めたる深層心理が表に噴出して来る。通常は、知性がこの噴火現象を押しとどめている。平常心が作動していれば、人は自分の醜き本能にも打ち勝てる。それが救いだ。

だが、本当にそれが救いだと考えていいのか。本能は致し方ない。好き嫌いは変えられない。重要なのは理性が本能に打ち勝つことだ。このように整理をつけてしまって、本当にいいのか。

旧約聖書の中に、次の言葉がある。「あなたがたは、心の中で兄弟を憎んではいけない」（レビ記十九章十七節）。憎しみを外に表さなければ、それでいいということではないのである。神様は、心の中における憎しみも許されない。これは、あまりにも厳し過ぎる。何とか、憎しみを外に出さないことで大目にみていただけないものか。感じちゃうことはしょうがないじゃない。そう言いたくなる。

だが、よく考えれば、やっぱりこれは違う。ここでもう一つの名言を思い出す。これは聖書ではない。推理小説の大御所様、アガサ・クリスティが生み出した名探偵、エルキュール・ポワロ先生の言葉だ。彼曰く、「お嬢さん、悪に向かって心を開いてはいけません。そうすれば、必ず悪はやって来ますよ。そうなってからでは、取り返しがつきません」（「ナイルに死す」）。魔がさすとは、このことだ。スポーツマンたちも、我々も、決して心に悪を呼び込んではいけない。（同志社大教授）

2014.8.3 東京新聞より